40981
教科書文庫
4
760
31-1932
2000080775

教科書文庫
4
760
31-1932
2000080775

新訂

尋常小學唱歌

第六學年用

文部省

広島大学図書
2000080775

3a
760
昭7

教科書文庫
4
760
31-1932
2000080775

資料室

広島大学図書
2000080775

文部省

新訂

尋常小學唱歌

広島大学
教
80775
図書

第六學年用

緒　言

一、本書ハ音樂教育ノ進歩ト時代ノ要求トニ鑑ミ、從來本省著作ニ係ル「尋常小學唱歌」ニ改訂ヲ加ヘタルモノナリ。

二、本書ハ毎卷二十七章トシ、取扱者ニ選擇ノ餘地ヲ與ヘタリ。

三、本書ノ歌詞ハ、舊歌詞中ノ適切ナルモノ、新作ニ係ルモノ、及ビ尋常小學國語讀本・尋常小學讀本中ノ韻文ノ一部ヨリ成ル。

四、本書ノ歌詞ハ努メテ材料ヲ各方面ニ採リ、文體・用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセンコトヲ期セリ。

五、本書ノ教材排列ハ强ヒテ程度ノ難易ノミニヨラズ、一面季節ニツキテモ考慮セリ。

六、本書ハ取扱者ノ便宜ノタメ、唱歌曲ノミノ樂譜ヲ揭ゲタルモノト、伴奏附ノ樂譜ヲ揭ゲタルモノト、二種類ヲ作製セリ。教授ニ際シテハ其ノ何レヲ採用スルモ可ナリ。

昭和七年十一月　　文部省

目　次

一　明治天皇御製……2
二　朧月夜……4
三　遠　足……6
四　我等の村……10
五　瀨戸內海……14
六　四季の雨……16
七　日本海海戰……18
八　我は海の子……22
九　日本三景……26
一〇　風……30
一一　蓮　池……34
一二　森の歌……36
一三　瀧……40
一四　出征兵士……44
一五　故　郷……48
一六　秋……50
一七　燈　臺……52
一八　天照大神……54
一九　鷲……58
二〇　鎌　倉……62
二一　霧……66
二二　鳴　門……70
二三　雪……72
二四　スキーの歌……76
二五　夜の梅……80
二六　齋藤實盛……82
二七　卒業の歌……86

明治天皇御製

♩=92

一二三

ドモさオ　ミノしノ　レマのガ　ドナぼミ　ミブるハ　ドミあカ　ドチさへ　レニひリ　レタのミ

ミッごズ　ミコとシ　レヨくテ　ミオさヒ　ソコわト　ミタやノ　ドリかタ　レニにメ　ミマもツ　ミサたク　ミレまス　レルほゾ　ドアしヒ

レタきト　ミ一一一　ドハはノ　ドナこツ　ドシこト　レ一一一　ミトろメ　ミシなナ　ファラりリ　レナけケ　ドムりル

一、明治天皇御製

一、物學ぶ道にたつ子よ、
　おこたりに、まされる仇は
　なしとしらなむ。

二、さし昇る朝日の如く、
　さわやかにもたまほしきは
　心なりけり。

三、おのが身はかへりみずして
　人のため、盡すぞ人の
　務なりける。

朧月夜

二調

♩=72

一 ナノハナバタケニイリヒウスレ
二 さとわのほかげ―もりのいろも

ミソタスヤマノ―ハカスミフカシ
たなかのこみち―をたどるひとも

ハルカゼソヨフ―クソ―ラヲミレバ
かはづのなくね―もか―ねのおとも

ユフ―ヅキカカリ―テニホヒアハ、ドシ
さながらかすめ―るおぼろづきよ

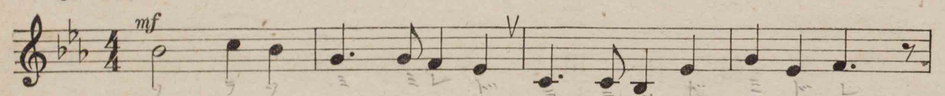
二、朧月夜

一、菜の花畠に、入日薄れ、
見わたす山の端、霞ふかし。
春風そよふく、空を見れば、
夕月かかりて、にほひ淡し。

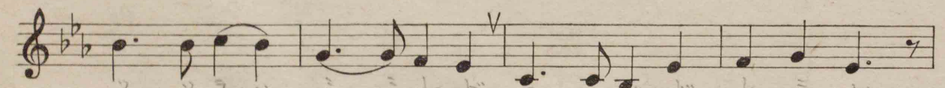
二、里わの火影も、森の色も、
田中の小路をたどる人も、
蛙のなくねも、かねの音も、
さながら霞める朧月夜。

遠足

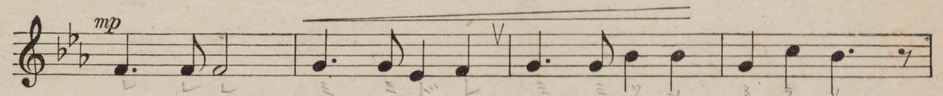
♩=120



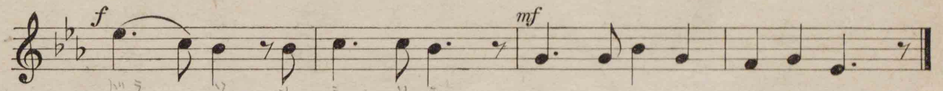
一 ナクヤヒバリノコエウララカニ
二 みぎにみゆるはなだかきみてら
三 タドリツキタルタウ—ゲノウヘニ
四 かせはおとなくやなぎをわたり



カゲロフ—モ—エテノハハレワタル
ひだりにと—ほくかすむはこじやう—
ナノハナニ—ホフサトミオロシテ
ふ—ねはしづかにわれらをのせて



イザヤワガトモウチツレユカン
はるはゑのごとわれらをめぐる
ワラヒサザメクヒルゲノムシロ
ゆくはいづこぞももさくむらへ



ケフ—ハウレシキエンソクノヒヨ
けふ—はたのしきゑんそくのひよ
ケフ—ハウレシキエンソクノヒヨ
けふ—はたのしきゑんそくのひよ

三、たどりつきたる峠の上に、
菜の花にほふ里見下して、
笑ひさざめくひるげのむしろ。
今日はうれしき遠足の日よ。

四、風は音なくやなぎをわたり、
船は靜かに我等をのせて、
行くは何處ぞ、桃さく村へ。
今日はたのしき遠足の日よ。

三、遠足

一、鳴くやひばりの聲うららかに、
かげろふもえて野は晴れわたる。
いざや、我が友うち連れ行かん。
今日はうれしき遠足の日よ。

二、右に見ゆるは名高き御寺、
左に遠くかすむは古城、
春は繪のごと我等をめぐる。
今日はたのしき遠足の日よ。

我等の村

♩=66

一 カスムヤマベ ―ハムラザキ―ニホヒノ
二 いでてたがや ―すをとこの―ためにそ
三 トメルマヅシ ―キサマザマ―ナレドム
四 ここぞわれら ―のうまれし―ところこ

poco rit. a tempo

べハコガネノナノハナザカリ―ハ
らノひばりはひねもすうたひ―う
ラヲアイスルココロハヒトッ―オ
こぞわれらのそだちしところ―や

ルノヒカリハクマナクミチテナ
ちにはたらくをとめのためには
イモワカキモタガヒニタスケム
がてわれらのちからによりてく

クヤニハト―リコエサヘノドカ
なはまがき―のほとりをかざる
ラハサナガ―ライ―ッカノムッビ
にのほまれ―となすべきところ

四、我等の村

一、霞む山べは紫にほひ、
野べは黄金の菜の花盛。
春の光はくまなく滿ちて、
鳴くや鷄聲さへのどか。

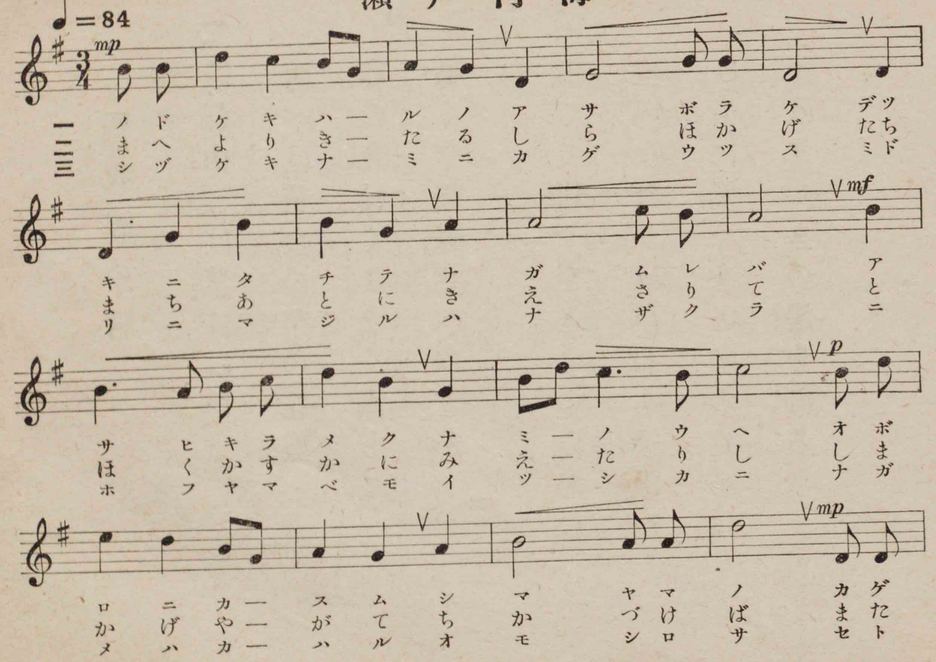
二、出でて耕すをとこのために、
空のひばりはひねもす歌ひ、
うちに働くをとめのために、
花はまがきの邊を飾る。

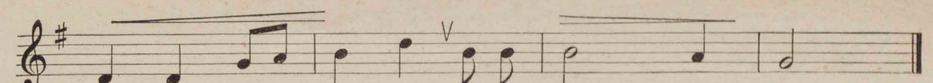
三、富める貧しき樣樣なれど、
村を愛する心は一つ。
老いも若きも互に助け、
村はさながら一家のむつび。

四、ここぞ我等の生まれし處。
ここぞ我等の育ちし處。
やがて我等の力によりて、
國のほまれとなすべき處。

瀬戸内海

♩=84





五、瀬戸内海

一、のどけき春の朝ぼらけ、
デッキに立ちて眺むれば、
朝日きらめく波の上、
おぼろにかすむ島山の
影おもむろに移りゆく。

二、前より來る白帆かげ、
忽ち後に消え去りて、
遠くかすかに見えたりし
島影やがて近づけば、
又あらはるる島いくつ。

三、靜けき波に影うつす
綠にまじる花ざくら、
にほふ山邊もいつしかに、
眺は變るおもしろさ、
瀬戸内海の船の旅。

四季の雨

♩=69

mf

一二三四　フにチき　ルばりく　トかチだ　モにりに　ミすソさ　一一一一　エぐソむ　ジるゲき　ハなアふ　ルつキゆ　ノのノの　アあアあ　一一一一　メめメめ

p

ミもコま　ゾほノど　ニしハの　ロざコな　チ一ノざ　カなミさ　クにチに　ナしノさ　ミらニや　一一一一　ナつヤさ　クゆマや　バなニと

ケなイふ　ブごロけ　ルりサゆ　トとマく　バしザよ　一一一一　カばマは　リしニな　オほソお　モしメと　ハら一づ　セせナれ　一一シ一　テてテて

mf

フにチき　ルばりく　トかチだ　モにりに　ミすソさ　一一一一　エぐソむ　ジるゲき　ハなアふ　ルつキゆ　ノのノの　アあアあ　一一一一　メめメめ

六、四季の雨

一、降るとも見えじ、春の雨、
水に輪をかく波なくば、
けぶるとばかり思はせて。
降るとも見えじ、春の雨。

二、俄に過ぐる夏の雨、
物ほし竿に、白露を
なごりとしばし走らせて。
俄に過ぐる夏の雨。

三、をりをりそそぐ秋の雨、
木の葉・木の實を野に、山に、
色さまざまにそめなして。
をりをりそそぐ秋の雨。

四、聞くだに寒き冬の雨、
窓の小笹にさやさやと、
更行く夜半をおとづれて。
聞くだに寒き冬の雨。

日本海海戰

♩=92

一テキカンミエタリチカヅキタ—リ
二しゆりよく—かんたいま—へをおさへ
三トウ—テンアカラミヨ—ギリハレテ

ミクニノコウ—ハイタダコノイツキヨ
じゆんやう—かんたいうしろにせまり
キヨクジツカガヤクニツポンカイジヤウ—

カクキンフンレイドリヨクセヨト
ふくろのねずみとかこみうてば
イマハヤノガルルスベモナクテ

キカンノホバシラシンガウ—アガル
みるみるてきかんみ—だれちるを
ウタレテシヅムモクダルモア—リ

ミソラハハルレドカゼ—タチテ
すゐらいていたいくち—くたい
テキコクカンタイゼン—メツス

ツシマノオ—キニナミタカシ
のがしはせ—じとおひてうつ
テイコクバンザイバンバン　ザイ

I. II.　III.

七、日本海海戰

一、『敵艦見えたり、近づきたり、
皇國の興廢、ただ此の一擧、
各員奮勵努力せよ。』と、
旗艦のほばしら信號揚る。
みそらは晴るれど風立ちて、
對馬の沖に浪高し。

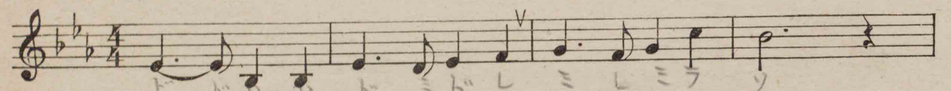
二、主力艦隊、前を抑へ、
巡洋艦隊、後に迫り、
袋の鼠と圍み擊てば、

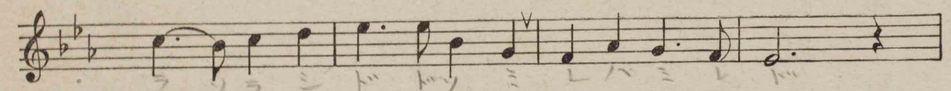
見る見る敵艦亂れ散るを、
水雷艇隊・驅逐隊、
逃しはせじと追ひて擊つ。

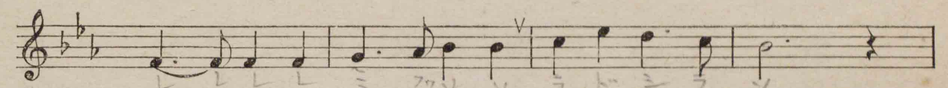
三、東天赤らみ、夜霧はれて、
旭日かがやく日本海上。
今はや遁るるすべもなくて、
擊たれて沈むも、降るもあり、
敵國艦隊全滅す。
帝國萬歲、萬萬歲。

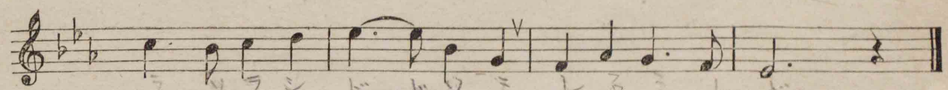
我は海の子

♩=126


ソラミシカリタンシ
ソクてニてルもテ
ミナみノつへざダ
レラあソやタ一リ
ミシゆイあキよノ
ひ
レコにク一ニふヲ
ドノほッいコよネ
ミミ一ナか一だ一
ドウしハろコたフ
メてクのセにホ
レれカよトみオ
ま一一ク一デ
ドワうタやイなイ
ち
一二三四五六七


ニきリらリやミ
ラきアくアんト
ミバとリまナれノ
ハツたヲみヒそミ
レマうカなカおウ
ミノのノぬキれン
ソべりナめタたハ
ドソも一だ一一ロ
ドイこハさカきヒ
シグをノてリばハ
ラワみンくョらレ
ノ一一ダ一ッた一
ラサなフゆテきソ
一二三四五六七


ソをヲこルもテ
フコきゼそタきミ
シャのカのミまク
ドマみクみロつリ
ラトうフうクたノ
ソクるニ一ニ一ニ
ソビくッろゼるン
ファナせ一ひ一ぐ一
ミタよマちカあカ
レリりノろホきン
レムんサひシまグ
レ一一ギもクみデ
レケせナもフうイ
一二三四五六七


レりクしニじニ
レナけキろラかク
ミカにハひガろノ
ファミりレはナどミ
レスなリにサおウ
ミキとトる一れン
ソシべクたウこラ
ドド一ら一れク一モ
ドカわガなヤおマ
シシッてキびハばハ
ラナひジそダらレ
ソガ一ミ一一こ一
ラワすイあハおワ
一二三四五六七

八、我は海の子

一、我は海の子、白浪の
さわぐいそべの松原に、
煙たなびくとまやこそ、
我がなつかしき住家なれ。

二、生まれてしほに浴して、
浪を子守の歌と聞き、
千里寄せくる海の氣を
吸ひてわらべとなりにけり。

三、高く鼻つくいその香に、
不斷の花のかをりあり。
なぎさの松に吹く風を、
いみじき樂と我は聞く。

四、丈餘のろ・かい操りて、
行手定めぬ浪まくら、

百尋・千尋海の底、
遊びなれたる庭廣し。

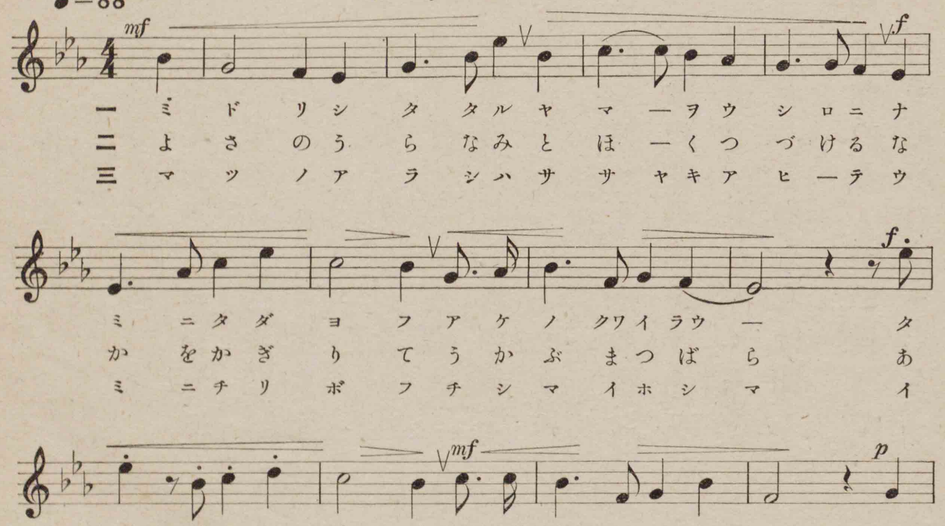
五、幾年ここにきたへたる
鐵より堅きかひなあり。
吹く塩風に黑みたる
はだは赤銅さながらに。

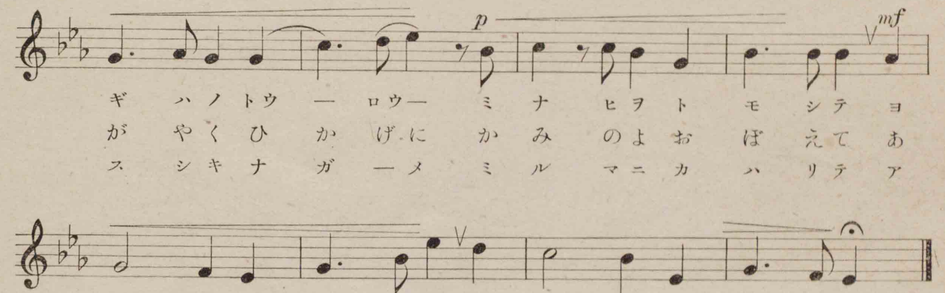
六、浪にただよふ氷山も、
來らば來れ、恐れんや。
海まき上ぐるたつまきも、
起らば起れ、驚かじ。

七、いで、大船を乘出して、
我は拾はん、海の富。
いで、軍艦に乘組みて、
我は護らん、海の國。

日本三景

♩=88


mf
f
一 ミ ド リ シ タ タ ル ヤ マ ―ヲ ウ シ ロ ニ ナ
二 よ さ の う ら な み と ほ ―く つ づ け る な
三 マ ッ ノ ア ラ シ ハ サ サ ヤ キ ア ヒ ―テ ウ
f
ミ ニ タ ダ ヨ フ ア ケ ノ クワイラウ ― タ
か を か ぎ り て う か ぶ ま つ ば ら あ
ミ ニ チ リ ボ フ チ シ マ イ ホ シ マ イ
mf
p
ッ ノ ミ ヤ キ ノ ス ガ タ ハ コ レ カ ミ
め の か よ ひ ぢ た え し は い つ か か
カ ナ ル カ ミ ノ ナ シ シ タ ク ミ ゾ ク


p
mf
ギ ハ ノ ト ウ ― ロ ウ― ミ ナ ヒ ヲ ト モ シ テ ヨ
が や く ひ か げ に か み の よ お ぼ え て あ
ス シ キ ナ ガ ―メ ミ ル マ ニ カ ハ リ テ ア
ル ノ ミ ヤ ジ マ サ ラ ニ ウ ッ ク シ
さ の は し だ て こ と に め で た し
メ ノ マ ッ シ マ イ ヨ ヨ メ ヅ ラ シ

九、日本三景

一、緑したたる山を後に、
波にただよふ朱の廻廊、
たつのみやゐのすがたはこれか。
みぎはの燈籠、皆火をともして、
夜の宮島、さらに美し。

二、與謝の浦波遠く續ける
中をかぎりて浮かぶ松原、

天の通路絶えしは何時か。
かがやく日影に神の代おぼえて、
朝の橋立、殊にめでたし。

三、松のあらしはささやきあひて、
海にちりぼふ千島・五百島、
如何なる神のなससし巧ぞ。
くすしきながめ見る間に變りて、
雨の松島、いよよ珍し。

風

♩=100

p　mp

一　カ　ゼヨカ　ゼ　ソ　モイ　ヅ　チヨ　リ
二　か　せよか　せ　そ　もモ　いづ　ちよ　りテ
三　ヨ　はフケ　ヌ　と　モシ　ビケ　いシ　でて
四　よ　はあけ　ぬ　と　くお　きい　でて

mf　mf

イ　ヅチフ　ク　ク　サノ　ウ　へ
いづちふ　く　くいけ　のう　へト
ネニユケ　バ　ナクガ　ゴ　トし
そのみれ　ば　くさは　ふ　し

ヤ　ブノナ　カ　ヲ　カヲ　ス　ギ
ヤもムり　のな　かト　ヲを　す　ぎ
もムセブ　ゴト　ヲタ　タ　キ
きはたふ　れ　はな　は　ち　り

タ　ニヲ　ス　ギ　シ　カモ　カ　ヨハヌ
さ　とを　す　ぎ　と　りも　か　よはぬ
マ　ドヲ　ウ　ッ　カ　ゼヤ　ウ　ラヤム
み　はお　ち　ぬ　か　せや　あ　れけん

f

オ　ク　ヤ　マ　コ　エ　テ
あ　ら　う　み　こ　え　て
ワ　ガ　コ　ノ　フ　シ　ド
よ　す　が　ら　こ　こ　に

一〇、風

一、風よ風、
そもいづちよりいづち吹く。
草の上、やぶの中、
岡を過ぎ、谷を過ぎ、
鹿も通はぬ
奥山こえて。

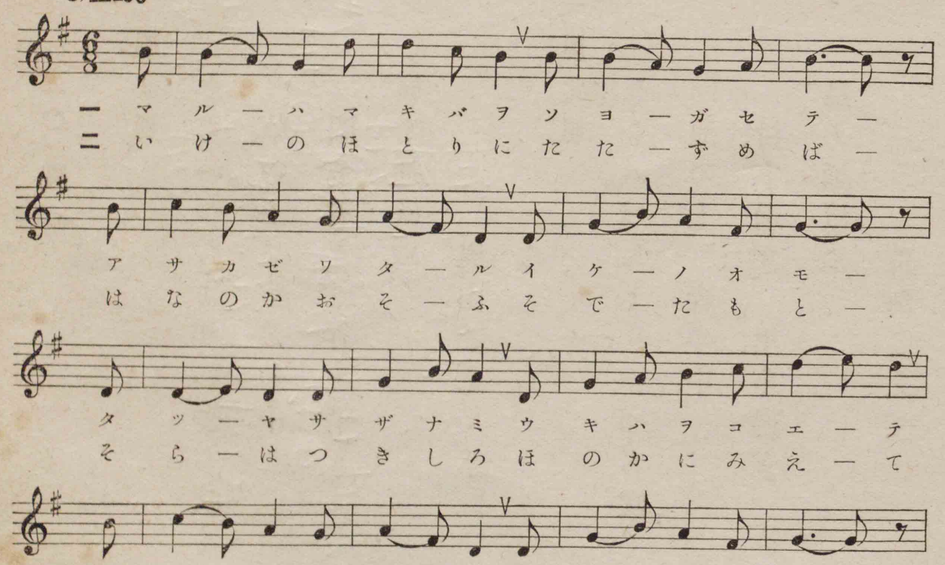
二、風よ風、
そもいづちよりいづち吹く。
池の上、森の中、
村を過ぎ、里を過ぎ、
鳥も通はぬ
荒海こえて。

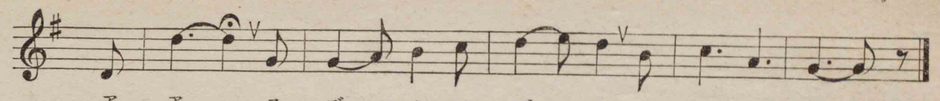
三、夜はふけぬ。
燈消してねに行けば、
泣くがごと、むせぶごと、
戸をたたき、まどをうつ。
風やうらやむ、
我が此のふしど。

四、夜は明けぬ。
とく起出でて園見れば、
草はふし、木はたふれ、
花は散り、實は落ちぬ。
風や荒れけん、
夜すがら此處に。

蓮　池

♪=160





一、蓮　池

一、丸葉・巻葉をそよがせて、
朝風わたる池のおも。
立つやさざなみ、浮葉を越えて、
まろびまろぶ露の玉。
ああ、涼し涼し、
あけぼの。

二、池のほとりにたたずめば、
花の香おそふ袖袂。
空は月しろ、ほのかに見えて、
水に白し花蓮。
ああ、涼し涼し、
ゆふぐれ。

森の歌

♩=63

mp

一 モリノオイキハコズエニミキニ
二 もりのしたみちたどりてゆけば

カミヨナガラノシンピヲコメテ
しばしこのまのくらさはれて

イトオゴソカニシヅマリタテリ
ふとみるかなたいづみはほがら

mf

フシギヤコダマハコダマヲヨビテ
ふしぎややまひめほほゑみたちて

p

モリノヒメゴトカタルトキケバ
みづにすがたをうつすとみれば

mf *f* *mp* *poco rit.*

アラズコヅタフトリノ—コエ
あらずひともとゆりの—はな

一二、森の歌

一、森の老木は、こずゑに幹に、
神代ながらの神祕をこめて、
いとおごそかに靜まり立てり。
ふしぎや、木靈は木靈を呼びて、
森のひめごと語ると聞けば、
あらず、木傳ふ鳥の聲。

二、森の下道たどりて行けば、
しばし木の間の暗さは晴れて、
ふと見るかなた、泉はほがら。
ふしぎや、山姫ほほゑみ立ちて
水に姿をうつすと見れば、
あらず、一もと百合の花。

瀧

♩= 116

mf

一 アヘギノボール ヤマノカケヂニ
二 きりをふくーむ かせのつめ、たく

mp

ハヤキコユルハ タキノオト
さとふきくれば なつのひの

mp

アタリニヒービーク タキノオト
あつさもしーらーぬ いはのうへ

p *cresc.*

コノシタヤミヨヌケイデテ
このしたかげにいこひつつ

f

ミアグレバメノマヘニ
みおろせばあしもとには

mp *mf*

アラノノフブキサナガラニオツルヨ
いくひやくせんのはくりようーのをどるよ

オツルーヨマシロキナガレ
をどるーよみどりのふちに

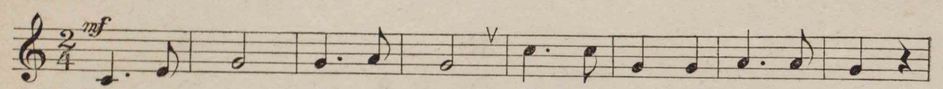
一三、瀧

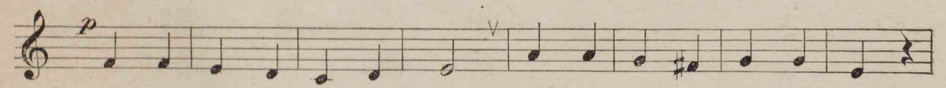
一、あへぎ登る山の懸路に、
はや聞ゆるは、瀧の音、
あたりにひびく瀧の音。
木の下闇を拔け出でて、
見上ぐれば、
目の前に、
荒野の吹雪さながらに、
落つるよ落つるよ、眞白き流。

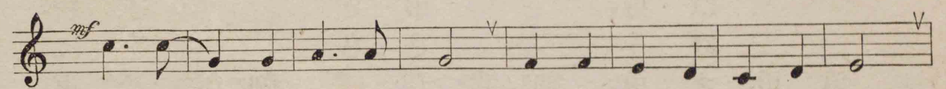
二、霧を含む風の冷たく
さと吹來れば、夏の日の
暑さも知らぬ岩の上、
木の下陰にいこひつつ、
見下せば、
足もとには、
幾百千の白龍の、
をどるよをどるよ、碧の淵に。

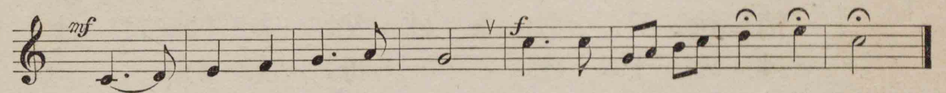
出征兵士

♩=112


mf
ココシケバシ
ガガレスラい
ワわウたサヘ
ケてシをハく
ユまマとハゆ
クよサとチで
トやイおチい
ヤかシへバみて
ケくレかラさ
ユゆウつサい
ヤばシにバみ
ケらレやラさ
ユさウおサい
一二三四五六


p
ッつハはバか
トとレれラつ
ヒひワわサい
ハはゾとトる
ミひトうウく
ゾがトもモお
ノねオいイみ
ノのノんバも
シめバも
チはイさラつ
チはへをサつ
ルるイをトし
タたセへウま
イいッ一トげ
オおユいオは
一二三四五六


mf
シヘンずテに
クとカけサれ
ッいユかサこ
ニをリにチは
ニだヨろノけ
クらトこ一さ
ミかアこイな
メばモばキに
をラに
トかレとタれ
ッゆワこハか
ノにミのノは
一さギへ一き
ウくニ一ウ一
ユ一ユ一
ギいアいブう
ゆ
一二三四五六


mf
f
ヨなンやハれ
ゲすタざレか
アしウいワわ
ニ一
ニにバせンの
ヤひヲまナし
ガまキきチを
ワやテゆウを
レもニヲし
とニにヲし
マすモめキさ
ホしトたテや
ノにイのノし
シまダにニま
一一一一
カウ
たヤウ
キみミい
くクさ
一二三四五六

一四、出征兵士

一、行けや、行けや、とく行け、我が子。
老いたる父の望は一つ。
義勇の務、御國に盡くし、
孝子の譽、我が家にあげよ。

二、さらば行くか、やよ待て、我が子。
老いたる母の願は一つ。
軍に行かば、からだをいとへ。
彈丸に死すとも、病に死すな。

三、うれし、うれし、勇まし、うれし。
出征兵士の弟ぞ、我は。
兄君、我も後より行かん、
兄弟共に敵をば討たん。

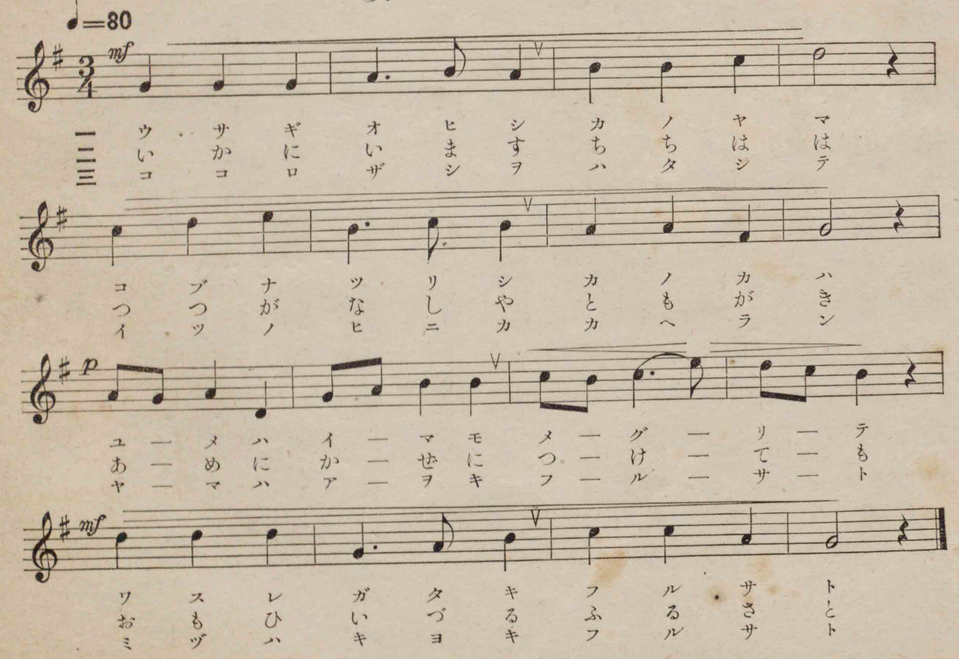
四、親に事へ、弟を助け、
家を治めん、妹我は。
家の事をば心にかけず、
御國の爲に行きませ、いざや。

五、さらば、さらば、父母、さらば。
弟さらば、妹さらば。
武勇のはたらき、命ささげて
御國の敵を討ちなん、我は。

六、勇み勇みて出行く兵士。
はげましつつも見送る一家。
勇氣は彼に、情は是に、
勇まし、やさし、ををしの別。

故郷

♩=80



一五、故郷

一、兎追ひしかの山、
小鮒釣りしかの川、
夢は今もめぐりて、
忘れがたき故郷。

二、如何にいます、父母、
恙なしや、友がき、
雨に風につけても、
思ひいづる故郷。

三、こころざしをはたして、
いつの日にか歸らん、
山はあをき故郷、
水は清き故郷。

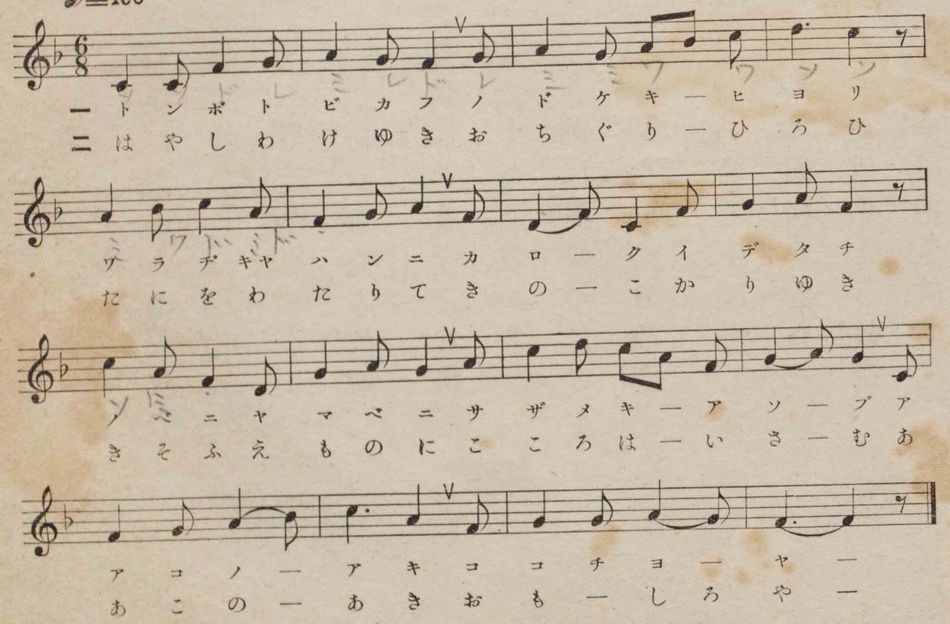
一六、秋

一、蜻蛉とびかふのどけき日和、
わらぢ・脚絆に輕くいでたち、
野べに、山べに、さざめき遊ぶ。
ああ、この秋、心地よや。

二、林わけゆき、落栗ひろひ、
谷をわたりて茸かりゆき、
きそふえものに心は勇む。
ああ、この秋、面白や。

秋

♪=160



燈臺

♩=104

一、ヌくニ　エほへ　ミとウ　へらノ　サばホ　シなハ　ホうイ　クにノ　ナよキ　キみサ　ツやミ　ハやノ　ニずコ　ラらシ　ソしカ

ニをク　ハるカ　ヨあタ　ノのキ　シりダ　ラかタ　アひイ　ヨるイ　ノせダ　キめ一　ユしウ　トヨをル　ノぢユ　メなビ　アふソ

ハでハ　ネえソ　フきコ　クにビ　ユしシ　ケらモ　ワあト　ミらク　ナがヤ　ラすガ　アよカ　クやル　マずヨ　カらル　サしヨ

ルをリ　レるモ　トあマ　カのキ　ヅしト　ヂか一　カあフ　ニるハ　べふニ　ルしネ　シをフ　カをフ　ヲてカ　ニくキ　ナゆユ

一七、燈臺

一、空には月なく、星さへ見えぬ
雨の夜、雪の夜、嵐の夜半に、
さかまく荒波分けゆく船は、
何をかしるべに舵柄取れる。

二、知らずや、闇夜に海原とほく
船路を示せる光のあるを。
知らずや、夜すがら嵐に消えで、
ゆくてを教ふるあかしのあるを。

三、かしこの岬の巖の上に
聳ゆる燈臺、頂高く、
夜夜輝くともし火こそは、
行きかふ船には尊きまもり。

天照大神

♩=100

一 トヨアシハラ一ノナカツクニ
二 あめ一のつくだにみたつくり
三 モウ一コノアタ一ノヨセシヒモ

スメミマユキテシロシメセ
いみはたどのにみぞおらせ
カミカゼコソハオコリシカ

アマ一ツヒツギハアメツチト
たふ一ときみみ一のさきだちて
コトクニマデ一モコトムケテ

キハマリナシ一トクニ一ノモト
あをひとぐさ一のなり一はひに
カガヤクミイ一ツマノ一アタリ

サダ一メタマヒシアマテラス
いそしみまし一しあまてらす
イマ一モムカシモアマテラス

カミノミコトゾウゴキナキ
かみのめぐみぞかぎりなき
カミノマモリゾイチジルキ

一八、天照大神

一、『豐葦原の中つ國、
皇孫行きて知ろしめせ。
天つ日嗣は天地と
窮りなし。』と、國の基
定め給ひし天照らす
神の御言ぞ動なき。

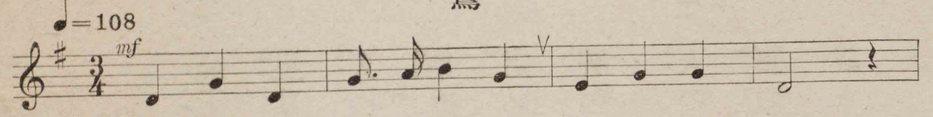
二、天の營田に御田作り、
齋服殿に御衣織らせ、
尊き御身の、さきだちて、

蒼生のなりはひに
いそしみましし天照らす
神の惠ぞ限なき。

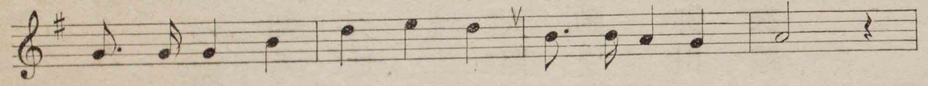
三、蒙古の敵の寄せし日も、
神風こそは起りしか。
こと國までもことむけて、
かがやく御稜威まのあたり、
今も、むかしも天照らす
神の護ぞいちじるき。

鷲

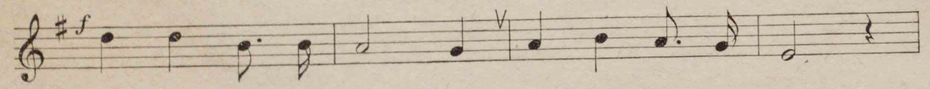
♩=108



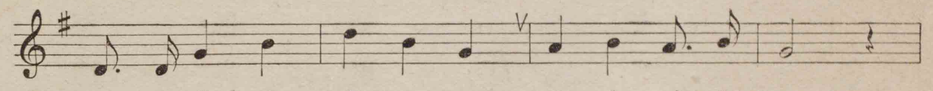
一 クモヲ シノゲル ラウボク ノ
二 ど たう ― さかまく せつかい の



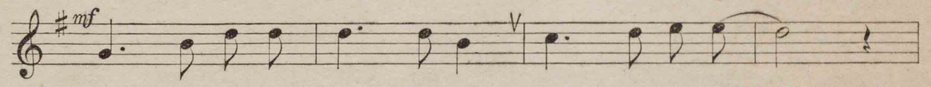
コズエノ ウヘノ アラワシ ハ
こ たう ― に す く ふ あらわし は



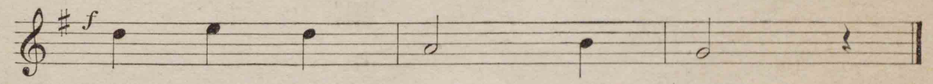
ヒロキウチウヲ ヘイゲイス
あらしを つい て あ ま か け り



ミソラノ クンシュ サナガラニ
は ぐく む ひ な に ゑ を は こ ぶ



ケダカク ヲヲシ ト リノワウ ―
や さ し く つ よ し と りのわう ―



ワシノ スガタ
わ し の こ こ ろ

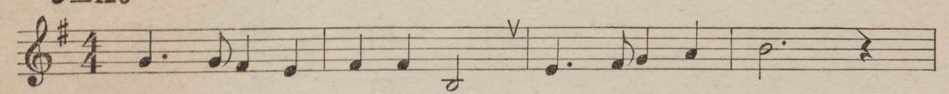
一九、鷲

一、雲を凌げる老木の
梢の上の荒鷲は、
廣き宇宙を睥睨す、
み空の君主さながらに。
氣高く、雄雄し、
鳥の王、鷲の姿。

二、怒濤逆巻く絶海の
孤島に巣くふ荒鷲は、
暴風雨をついて天翔り、
育む雛に餌を運ぶ。
やさしく、つよし、
鳥の王、鷲の心。

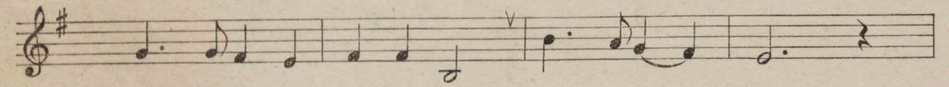
鎌倉

♩=120



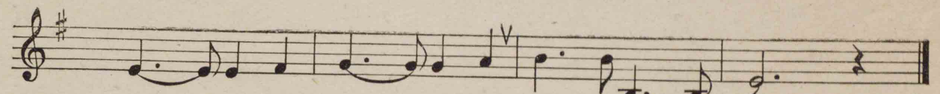
ヒばテのデはシの
タけミしソてクら
ヅゆニはノでヒヤで
ソえギざヒ一チる
イこミきマうシふ
ノかヲのノにシくが
マざマし一一ガん
ハじハいウうナる
ダぐ
ガくノやヤらハ一
リらヒるミくシちヤう
チく一ばカまキん
シごユのヲかレけ

一二三四五六七八



ノくバ一シにテに
一かケふへみニせ
イ一ちシヤウユいカらニか
ギほリうメつ
メだうスおクみユま
キのチミきキのテき
サんタかマこべか
ガのシたダみスた
ラんノにヲぬ一ん
ムわくキりノせバウも
ナせ一だヅき一ん
イはユひシつウコさ

一二三四五六七八



一すロとツしヌん
ウヤまシあツべシら
ヂ
ンしャのビぬムる
セはンよノきケも
コおオよシわコこ
シつ一きヲだハや
ゼぶノほトみカと
一い一一一一一一一
ウだウとヒなハお
トグ
ギ一ンやシの一の
ルのマばシんウし
一ざチはへふイか
ッろハとカひエむ

一二三四五六七八

二〇、鎌倉

一、七里が濱のいそ傳ひ、
稻村崎、名將の
劒投ぜし古戰場。

二、極樂寺坂越え行けば、
長谷觀音の堂近く、
露坐の大佛おはします。

三、由比の濱邊を右に見て、
雪の下道過行けば、
八幡宮の御社。

四、上るや石のきざはしの
左に高き大いてふ、
問はばや、遠き世世の跡。

五、若宮堂の舞の袖、
しづのをだまきくりかへし
かへしし人をしのびつつ。

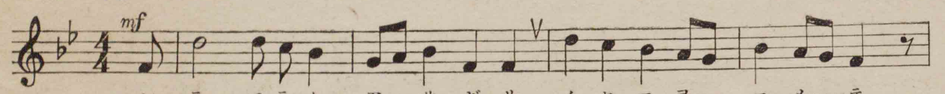
六、鎌倉宮にまうでては、
盡きせぬ親王のみうらみに、
悲憤の涙わきぬべし。

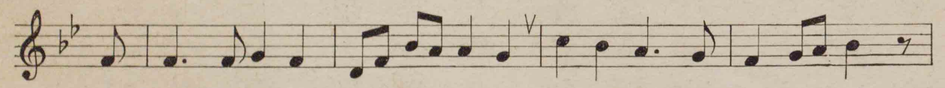
七、歷史は長し七百年、
興亡すべてゆめに似て、
英雄墓はこけむしぬ。

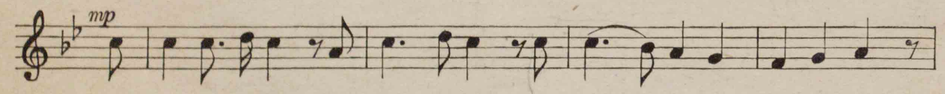
八、建長・圓覺古寺の
山門高き松風に、
昔の音やこもるらん。

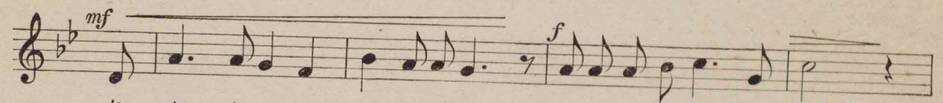
霧

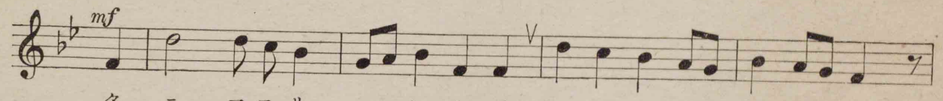
♩=84

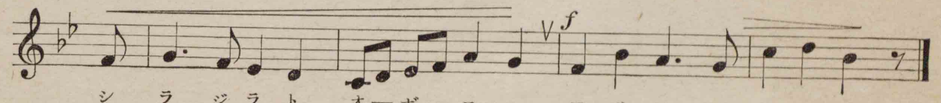

mf
一 シラジラト アーサギリ ノヤマヲー コメーテ
二 しめやかに よーのきり ちまたをー つつーみ


ツキノゴト ニーチーリン ホノカニウカーブ
たちならぶ いーへーいへ ともしびうるーむ


mp
ノヂヲユク ヒトカゲ タダーチニ キエテ
かげのごと ひとさり ひと一くる おほぢ


mf
f
ケタタマシモズノネ コズエハイヅコ
ほろほろと きこゆる ふえのねいづこ


mf
タニマヨリ ハーヒイデ キノミキーヌラーシ
まどぎはに はーひより がらすどーぬらーし


f
シラジラト オーボーロニ アサギリナガル
しめやかに ひーそーかに よのきりながる

二、霧

一、しらじらと、
　朝霧野山をこめて、
月のごと、日輪ほのかに浮かぶ。
野路を行く人影ただちにきえて、
けたたまし、もずの音、
　こずゑはいづこ。
谷間よりはひ出で、木の幹ぬらし、
しらじらと、
　おぼろに朝霧流る。

二、しめやかに、
　夜の霧ちまたをつつみ、
立ち並ぶ家家、ともしびうるむ。
影のごと、人去り人來る大路、
ほろほろと聞ゆる笛の音いづこ。
窓ぎはにはひ寄り、
　ガラス戸ぬらし、
しめやかに、
　ひそかに夜の霧流る。

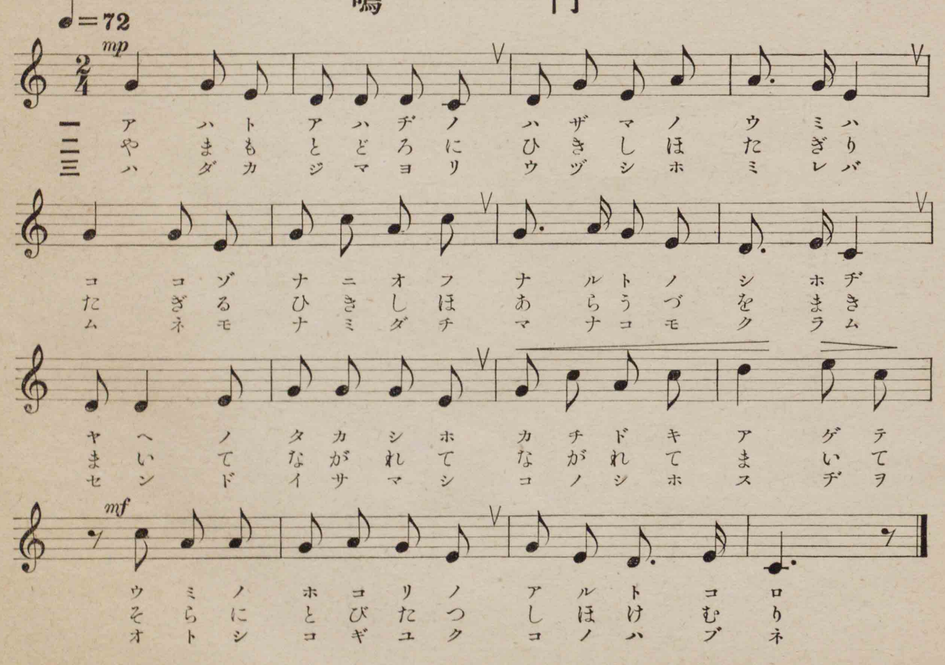
二三、鳴門

一、阿波と淡路のはざまの海は、
此處ぞ名に負ふ鳴門の潮路。
八重の高潮かちどき揚げて、
海の誇のあるところ。

二、山もとどろに引潮たぎり、
たぎる引潮あら渦を巻き、
巻いて流れて、流れて巻いて、
空にとびたつ、潮けむり。

三、裸島より渦潮見れば、
胸も波だち眼もくらむ。
船頭勇まし、此の潮筋を、
落し漕ぎゆく、木の葉舟。

鳴門



雪

♩=63

mf　p

一　アザヤカニ　ユキーコソ　ツモレ
二 pひそひそと　ppささーやく　けはひ

mp　mf

アケガタノ　メヌキノトホリガイ
mpふるゆきの　pよるのしづけさmpほど

p

ロジユモシロガネナシテ　アマソソルタカ
ちかきちんじゆのもりの　pいてふーのきひと

キタテモノアブラヱノケシキニター
りそびえてうきぼりの　きよざうーのごとー

少し早く ♩=80

p　mp

リ　カカルトキ　アサノキテキノ
し　ppう　すれゆく　pまどのともしび

f

チマタヨリ　チマタヲコメテ　タカナレバ
ひとはみな　mfねやにこもりて　むらざとは

mf 次第に遅く

ヒトハメザメヌ　ワウ——ライハ　ザワメキタチテ
mpふかくねむりぬ　ゆきーをれの　pたけのひびきも

mf Tempo I.　rit.

ユキカキノ　オトモマジレリ
まどかなる　ppゆめをみださず

二三、雪

一、鮮かに雪こそ積れ、
明方の目ぬきの通。
街路樹も銀なして、
天そそる高き建物、
油繪の景色に似たり。
かかる時、朝の汽笛の
巷より巷をこめて
高鳴れば、人は目覺めぬ。
往來はざわめき立ちて、
雪かきの音もまじれり。

二、ひそひそとささやくけはひ、
降る雪の夜の靜けさ。
程近き鎭守の森の
いてふの木ひとりそびえて、
浮彫の巨像の如し。
薄れ行く窓の燈、
人は皆ねやにこもりて、
村里は深く眠りぬ。
雪折れの竹の響も、
圓かなる夢を亂さず。

スキーの歌

♩=120

一 カガヤクヒノカ—ゲ —ハユ—ル —ノヤ—マ
二 とぶとぶおほぞ—ら —はし—る —だい—ち
三 ヤマコエヲカコ—エ —クダ—ル —シヤメ—ン

カガヤクヒノカ—ゲ —ハユ—ル —ノヤ—マ フ
とぶとぶおほぞ—ら —はし—る —だい—ち いつ
ヤマコエヲカコ—エ —クダ—ル —シヤメ—ン タ

モトヲメガケテスタ—トキレ—バ
ばくかげな—きてんち—のうち—を
チマチサヘギルタニヲ—バメガ—ケ

コユキハマヒタ—チ —カゼ—ハ —サケ—
すとつくかざし—て —われ—は —かけ—
ヲドレバサナガ—ラ —ヒテウ—ノ —ココ—

ブカゼハサケ—ブ
るわれはかけ—る
チヒテウ—ノココ—チ

✽ この二重音は低音部を主旋律とす

二四、スキーの歌

一、輝く日の影、はゆる野山。
輝く日の影、はゆる野山。
麓を目がけてスタートきれば、
粉雪は舞立ち、風は叫ぶ、
風は叫ぶ。

二、飛ぶ飛ぶ大空、走る大地。
飛ぶ飛ぶ大空、走る大地。
一白影なき天地の中を

ストックかざして我は翔る、
我は翔る。

三、山越え、丘越え、下る斜面。
山越え、丘越え、下る斜面。
忽ちさへぎる谷をば目がけ、
躍ればさながら飛鳥の心地、
飛鳥の心地。

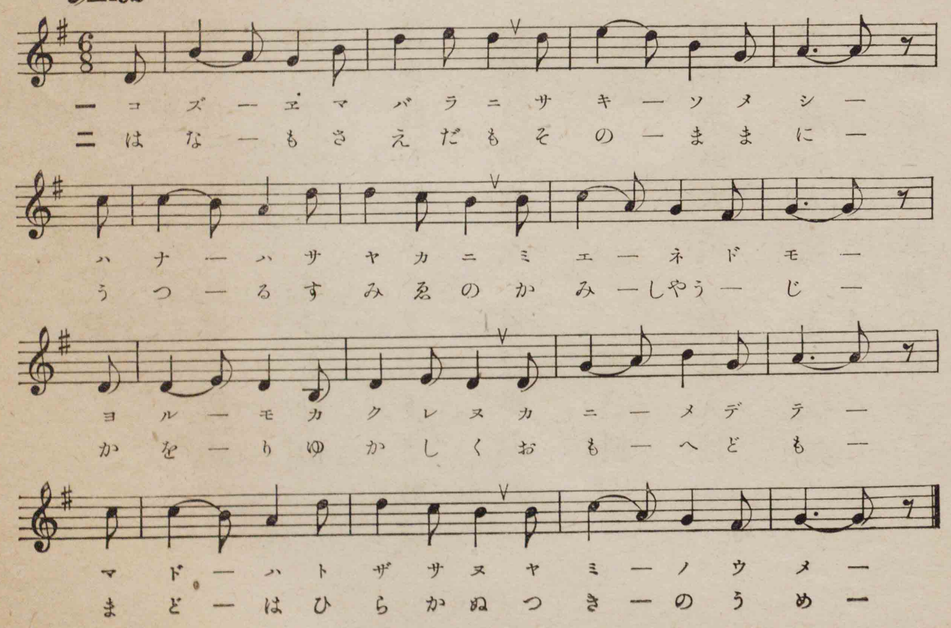
二五、夜の梅

一、梢まばらに咲初めし
花は、さやかに見えねども、
夜もかくれぬ香にめでて、
窓はとざさぬ闇の梅。

二、花も、小枝もそのままに
うつる墨畫の紙障子。
かをりゆかしく思へども、
窓は開かぬ月の梅。

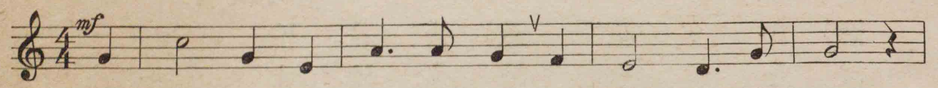
夜の梅

♪=152

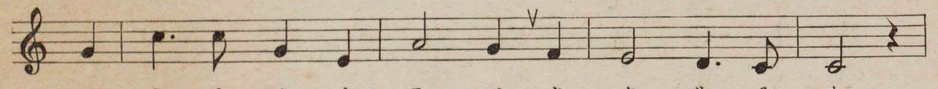


齋藤實盛

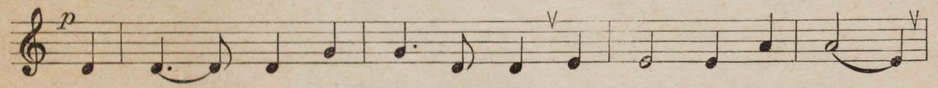
♩=92



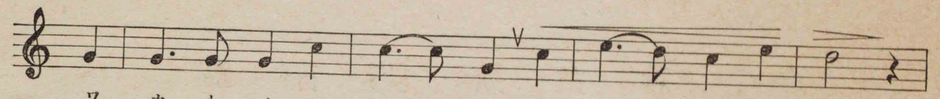
一トシハオユトモシカスガニ
二にしきかざりてかへるとの



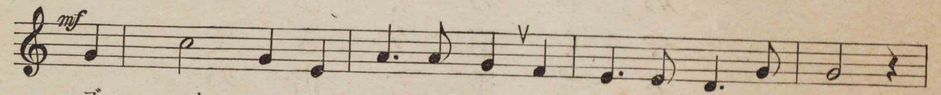
ユミヤノナヲバクタサジト
むかしのためしひきいでて



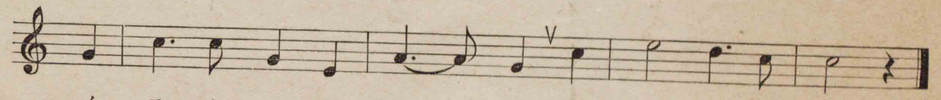
シロ一キビンヒゲスミニソメ一
のぞみのごと一くこひえつる一



ワカトノバラ一トキソ一ヒッッ
あか一ぢにしきのひた一たれを



ブユウノホマレヲマツダイマデ
こきやうのいくさにかがやかし



ノコシシキミ一ノヲヲシサヨ
きみ一がこころのやさしさよ

二六、齋藤實盛

一、年は老ゆとも、しかすがに
弓矢の名をばくたさじと、
白き鬢鬚墨にそめ、
若殿原と競ひつつ、
武勇の譽を末代まで
殘しし君の雄雄しさよ。

二、錦かざりて歸るとの
昔の例ひき出でて、
望の如く乞ひ得つる
赤地錦の直垂を、
故郷のいくさに輝かしし
君が心のやさしさよ。

卒業の歌

♩=104

一二三四

ウウウウ レレレレ シシシシ レレレレ シシシシ ヤヤヤヤ ウウウウ レレレレ シシシシ ヤヤヤヤ ナナナナ

ヒいムし トろトの ノのノた コいツま ドをキも ノもヒの モ一一の オわデち シきチを ナまトと べへりく テぬチを

フみチか ムのシぢ チいへに ミつメし クしマを ノにシに ニかヒり オつシよ キみノの チえキう ナたミみ ルろノを

マにミわ ナしチた ビもビり ノひキて ミがナゆ チしクか ムしイな ノもバん トらカほ セざデた チりリか バしがき

チみコま へのコな シいロび フつニの コかラか ソにクれ ウわチよ レけハぢ シえトて ケたクみ レろハん

ヤよオし ナのモの サとバみ ギひへき クなウさ ラみレら ノのシば ハもシす ルじノこ ニのナや ホかサか フすケに

ニよオわ ジのモが チとバも キひへと ソなウさ ヘみレら テのシば ノみシす モちノこ ヤのメや マすグか モぢミに

二七、卒業の歌

一、うれし、うれしや、うれしやな。
人の子どもの、おしなべて
ふむを御國のおきてなる、
學の道の六年をば
卒へし今日こそうれしけれ。
柳櫻の春にほふ、
錦をそへて野も、山も。

二、うれし、うれしや、うれしやな。
いろはのいをもわきまへぬ
身のいつしかに積得たる、
西も、東も知らざりし
身のいつしかに分得たる、
世の人並の文字の數、
世の人並の道の筋。

三、うれし、うれしや、うれしやな。
六年の月日、手を取りて
教へ給ひし師の君の
導なくば、いかで我が
心に開く、智は、德は。
思へばうれし、師の情、
思へばうれし、師の惠。

四、うれし、うれしや、うれしやな。
師の賜の智を、德を、
かぢに、しをりに、世の海を
わたりて行かん、なほ高き
學の高嶺よぢて見ん。
師の君さらば、健かに、
我が友さらば、健かに。

發行所　大日本圖書株式會社
東京市京橋區銀座一丁目五番地

印刷所　共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷者　大橋光吉
東京市小石川區久堅町百八番地

代表者　取締役社長　杉山常次郎

發行者　大日本圖書株式會社
東京市京橋區銀座一丁目五番地

製複許不

著作權者　文部省

昭和七年十二月十日發行
昭和七年十一月三十日印刷

定價金拾參錢

新訂尋常小學唱歌　第六學年用　15